

学生チューターの成長を促すチュートレーニングの開発と形成的評価

Development and Formative Evaluation of Tutor Training for Growth of the Student Tutor

渡邊 浩之* 鈴木 克明* 戸田 真志* 合田 美子*

Hiroyuki WATANABE Katsuaki Suzuki Masashi Toda Yoshiko Goda

熊本大学大学院教授システム学専攻*

University of Kumamoto Graduate School of Instructional Systems

〈あらまし〉学生チューターの成長を促すためのツールの一つとしてインストラクショナルデザイン(ID)の第一原理をベースにしたオンラインチュートレーニング教材を開発し、専門家および現役チューターによる形成的評価を行った。その結果①テキストの内容や量は適当である②各種テストの内容や量は適当である③初心者チューターにすすめたいとの評価を得た。また、全員想定時間内に終了した。逆に問題点としては、コンテンツ(Moodle)のナビゲーションがあげられた。その他実技練習の提示方法や実施時期についての提案があり、これらの課題を検討し教材の修正をおこなった。

〈キーワード〉 インストラクショナルデザイン(ID) IDの第一原理 オンライントレーニング 学生チューター 形成的評価

1. はじめに

渡邊ほか(2014)は、初心者の学生チューターがスムーズな学習支援をおこなうためのツールとして、チュートリングガイドライン(以下「ガイドライン」という。)を開発、運用方法を提案し、現場で実践することでその有効性を検討した。毎回提出される自己評価から得られたデータで χ 二乗検定をおこなったところ、回を重ねるとガイドラインに従ったチュートリングができたことが明らかになった。また、実施後のアンケートからチュートリング時にガイドラインを意識して利用していることが分かった。

このようにガイドラインは一定の効果を得たが、学習者へのアンケートでは、一部のチューターの言動や態度に問題があり、また委託業者からは、勤務報告の遅れも指摘されている。そこで、これらの課題解決を検討した結果、全体へのアナウンスと共に問題部分を中心にトレーニングで補強することにした。

2. 先行事例と対象者

一般にチューターのトレーニングは、対面で行われているケースが多い。また、CRLAが要求しているLevel 1のトレーニング形式では、最低6時間は、トレーナーが監督し、対話式、リアルタイムでおこなわれなければならない。ただし、これは、CRLAの認証が必要な場合であり、米国

では、文字ベース(HTML, Powerpoint)およびビデオでのトレーニングも散見される。

さて、本研究が対象としているチューターは、私立A大学法学部の2年生から4年生で、2015年度前期の人数は47名である。現在おこなわれている研修は、外部講師による法律科目の理解のためのものであり、ガイドラインの方向性とは異なっている。またチューターには、これ以外に集合研修をする余裕はない。そこでチューターの負担を最小限にするため今回は、Moodleによるオンライントレーニングを選択することにした。

3. メリルの第一原理と設計

具体的な設計は、メリルのIDの第一原理(MERRILL, 2002)(図1)をベースにした。メリルは、IDモデルの効果的な学習環境は①現実の問題への取り組み②活性化③提示④応用⑤統合の各フェーズを踏まえて教材を作成することがポイントだとしている。そこで、これらを踏まえ、教材の最初から現実にかかる可能性のある事例にそって作成することにした。(表1)

教材のコンテンツは、表2のとおりである。事前テストおよび事後テストは、8割以上を合格とした。また、毎回確認のための小テストとテキストで学んだことを実際に自分で試してもらうために実技練習を組み込むことにした。

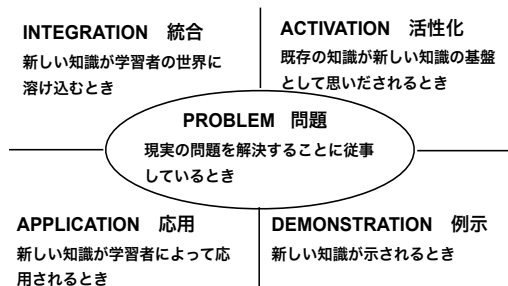


図1 IDの第一原理 (MERRILL (2002)p.45のFigure 1に日本語の説明を追加)

表1 IDの第一原理への適用

方略	教材への適用
問題	チュータリングの現場ですぐに使えるコミュニケーション技法の基本を中心とした知識とタスクを準備する。
活性化	大学に入学してからの経験と過去にチュータリングを受けた経験を結合させる。
例示	どの様な状況で使うのかを例示する。
応用	知識として得たものを実技練習で試してみることができるようにする。
統合	得たものを現場で活用し、その結果を振り返ることができる。

表2 トレーニング教材のコンテンツ

前提テスト	
事前テスト30問 (選択式)	
1	チュータリングとは何か
2	勤務内容を報告
3	自己評価について
4	アイスブレイク
5	聴く姿勢(1)
6	聴く姿勢(2)
7	質問の技法
8	緊急救護通報を行う
9	問題行動への対応
10	参考文献の書き方
事後テスト30問 (穴うめ)	

まず、この研修の骨格部分である、コミュニケーションに関する4回分のみを先行で作成した。

4. 形成的評価

教材は、昨年12月に一对一の形成的評価を行った。評価者は、現役チューター2名と専門家2名である。第一筆者が、Moodle上で教材を使用する評価者の横で観察し、終了後に半構造式インタビューをおこなった。なお、時間については、すべての評価者が想定時間より短い時間で終了した。これは、想定時間を長めにとっておいたこ

と、Moodleの操作法については、分からない場合は、指導したということもあった。

コンテンツ終了後の質問内容は、①テキストの内容や量②テストの内容や量③コンテンツのレイアウト④実施時期⑤初心者チューターにすすめたいかといったことである。結果は①から③までは、適当である。④は、初心者チューターにすすめたいとの評価を得た。逆に問題点としてあげられたのは、コンテンツのナビゲーションが面倒だということ、事前テストが文脈で回答できることである。また、実施時期は、ガイダンス前が望ましいのではということや実技練習の回答は掲示板を利用したほうが良いとの提案があった。そこで、これらの課題を検討し教材の修正をおこなった。

5. コンテンツの修正と追加

まず、コンテンツのナビゲーションだが、当初は、プラグインの導入を考えていたが、Moodleのバージョンが合わずに断念した。そこで次の回に進むときにリンクを貼ることで改善した。次に実施時期は、最初ということもあり、新学期のガイダンス後に実施することにした。また、事前テストは、事後テストと同様に穴埋め式に変更した。最後の実技練習の回答方法は、受講生の孤立感を防ぐことも出来ると考えられるので、掲示板へ報告し、各自の提出物に対して相互コメントをするようにした。これらの修正後にコンテンツを追加して、完成した。

6. 今後の研究計画

今後は、2015年度前期に教材を試用し、その後のアンケートやインタビューで評価する予定である。なお、学習者が、教材をうまく使えこなせずに当初の問題点が改善できない可能性もある。その場合も含め、更に改善を続け完成度を高めたいと考えている。

引用・参考文献

- 渡邊浩之, 鈴木克明, 戸田真志, 合田美子(2014) チュータリングガイドラインの開発と形成的評価について, リメディアル教育研究, 9(2): 47-58
- MERRILL, M.D. (2002) First Principles of Instruction. Educational Technology Research and Development, 50 (3): 43-59